

司式:三田村雅子
奏楽:堀口 恵美

前奏:「ああ、憐れな罪人われを」(J.L.クレプス)

招詞:主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。(イザ55:6、7b)

讚美歌 7「ほめたえよ、力強い主を」

交読詩編 96

- 01 新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。
- 02 主に向かって歌い、御名をたたえよ。日から日へ、御救いの良い知らせを告げよ。
- 03 国々に主の栄光を語り伝えよ/諸国の民にその驚くべき御業を。
- 04 大いなる主、大いに賛美される主/神々を超えて、最も畏るべき方。
- 05 諸国の民の神々はすべてむなしい。主は天を造られ
- 06 御前には栄光と輝きがあり/聖所には力と光輝がある。
- 07 諸国の民よ、こぞって主に帰せよ/栄光と力を主に帰せよ。
- 08 御名の栄光を主に帰せよ。供え物を携えて神の庭に入り
- 09 聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ。全地よ、御前におのけ。
- 10 国々にふれて言え、主こそ王と。世界は固く据えられ、決して揺らぐことがない。主は諸国の民を公平に裁かれる。
- 11 天よ、喜び祝え、地よ、喜び躍れ/海とそこに満ちるものよ、とどろけ
- 12 野とそこにあるすべてのものよ、喜び勇め/森の木々よ、共に喜び歌え
- 13 主を迎えて。主は来られる、地を裁くために来られる。主は世界を正しく裁き/真実をもって諸国の民を裁かれる。

朗読聖書①イザヤ書 14:12-23

◆バビロンの滅亡(後半)

- 12 ああ、お前は天から落ちた/明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた/もろもろの国を倒した者よ。
- 13 かつて、お前は心に思った。「わたしは天に上り/王座を神の星よりも高く据え/神々の集う北の果ての山に座し
- 14 雲の頂に登って/いと高き者のようになろう」と。
- 15 しかし、お前は陰府に落とされた/墓穴の底に。
- 16 お前を見る者は、まじまじと見つめ/お前であることを知って、言う。「これがかつて、地を騒がせ/国々を揺るがせ
- 17 世界を荒れ野とし/その町々を破壊し/捕らわれ人を解き放たず/故郷に帰らせなかった者か。」
- 18 国々の王は皆、それぞれの墓に/礼を尽くして葬られる。
- 19 しかし、お前は墓の外に投げ捨てられる/忌むべきものとされた水子のように。剣で刺された者、殺された者に囲まれ/陰府の底まで下って行く/踏みつけられた死体のように。
- 20 お前は、自分の国を滅ぼし/自分の民を殺したので/彼らと共に葬られない。悪を行う者たちの末は/永遠に、その名を呼ばれることはない。
- 21 彼らの先祖の咎のゆえに/その子孫のために、屠り場を備えよ。再び、彼らが立ち上がって、世界を奪い/地の表を町々で満たすことがないように。
- 22 「わたしは、彼らに立ち向かう」と/万軍の主は言われる。「バビロンから、その名も、名残も/子孫も未裔も、すべて断ち滅ぼす」と/主は言われる。
- 23 また、「都を山あらしの住みか、沼地とし/滅びの幕で、掃き清める」と/万軍の主は言われる。

朗読聖書②ルカによる福音書 10:17-24

◆七十二人、帰って来る

17 七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」

18 イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。

19 蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは一つない。

20 しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んでほしくない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

◆喜びにあふれる

21 そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたえませ。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。

22 すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかには、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかには、だれもいません。」

23 それから、イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたのしているものを見る目は幸いだ。

24 言うておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

祈祷

主イエス・キリストの父なる神さま、聖名を崇め賛美致します。

受難節第二主日の今日、兄弟姉妹と共にこの礼拝堂に集めて戴き、あるいはライブ配信で共に礼拝を献げられることを感謝致します。

イエスさまの苦難への歩みの一步一步を確かめつつ歩む張り詰めた思いの深い期間であります。この間、3月10日には東京大空襲で数万人の一般人が亡くなりました。その80年目の記念日も迎えました。その数日後に井上良雄長老が焼け跡の散乱したこの教会の中で洗礼を授けられたことを福田啓三長老が仰ったことも記憶に新しいところです。焼け跡の中から志を立ててこの教会を継承していったその人々の志を改めて思い興して、その思いを新たにしていきたいと願っております。どうぞ、私どもの群れにお心を寄せ、神さま、上から見守ってくださいますようお願い致します。

現在の世界は大国の指導者のエゴに振り回されて右往するばかりで混沌と閉塞感がいや増すばかりです。こうした中で、宗教への思いが薄れている、信者の数が激減している、というふうに言われます。正に宗教界の危機そのものですが、こうした中で、実は何よりも求められているのは、宗教による救いなのではないでしょうか。私たちの本当の救いと交わりを求め、そしてこの教会の志を継いでいきたいと深く願っております。その志を持ち続けられますように、どうぞ、上からの励ましをお与えくださいますようお願い致します。

今日は、ようやく体調を回復された鮎川先生によるお話を戴きます。先生の肉声でのお話をお聴きするのはあと僅かですけれども、そのお言葉に耳を傾け、そのメッセージを心に刻んでいきたいと願っております。私共、至らぬ日常を過ごしておりますが、どうぞ、そのお言葉によって、私たちの暗闇を開いていただきたいと願っております。

至らざる祈りですが、これらの言葉を主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げ致します。アーメン。

讚美歌 512「主よ、献げます」

説教「まことの喜び」

鮎川健一

今朝は灰の水曜日から始まった受難節により、第二主日を迎えています。この日はレミニスツェレ(主よ、思い起こしてください)との名称を持つ主日です。ちなみに先週の主日は、インヴォカヴィット(彼が私を呼び求めるとき)という名を持っています。これらの名称は受難節第五主日までありますが、日本基督教団は1941年に創立された時から各教派の合同教会として今に至るため、特定の教派の教会暦や典礼式を用いていません。しかしそれぞれの教会の伝統にありつつも、この期間は引き続き、洗礼の記念または準備期間を備え、悔い改めをもって信仰者が神の言葉をより熱心に聴き、また祈り励むようにして、主の復活秘儀を祝う準備期間となっています。

今朝は恵みに恵みを重ねる中であって、ルカ福音書10章から御言葉に聴きます。そこでまず『幸福』ということに何を思うでしょうか。それは人それぞれでしょうけれども、多くの場合は、今よりも、“もしこうであれば…”と、何かしらの改善や向上心を抱くものでしょう。しかし、たとえ自分の思いが叶ったとしても、次々と願いを募らせ、その殆どが叶わないと思うと、“これは幸せではない”と判断することがあるものです。またそこから向かうことは、自分が思っている所とは違う所に幸せがあることに気づかされることです。今朝の箇所では、弟子たちが一つの喜びの中にある時に、本当の喜び、本当の幸せが何処にあるかを主が弟子たちに語りました。

以前12人の弟子たちを遣わしたときのように、今度は72人の弟子を遣わしました。この時に「悪霊が追い出される」という出来事が色々な所で起こりました。実際、私たちが、もしこの時代、この時、この場面に遭遇した場合、言いようもない境遇に駆られることでしょう。説明できない思いに置かれます。今まで縛られていた人が自由になり、暗くなっていた人が明るくなり、神の御業が目の前で次々と起こる。そこで弟子たちは喜んで帰って来たのです。そして主に「あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します」と報告しました。自分の力ではなく、主の力に端を発するということが、さすがの弟子たちも重々知っていたことです。この時に主は、「サタンが稲妻のように天から落ちるのを見た」と言います。これは非常に大切な真理を私たちに教えて下さっています。それは、私たちが福音宣教、神の御言葉を宣べ伝える時に、神の御業が進展し、悪の業が打ち壊されていく、主の御業の勝利がこの地に起こる事を示唆していると受け止められるからです。以前から確認してきていますが、私たちは“ただ宣教をするだけ”と思いますが、そこには実際、悪魔の力を打ち壊していく主の力が裏打ちされていることを覚えたいと思います。

国によって、救われる人の率と申しましょうか、信仰者として教会に連なる人のあり方が異なるのはどういうことかということも考えます。これは福音宣教が絶え間なく激しくなされていく時に、そこに悪の業が打ち壊されていくという出来事が起こるのです。厳しい日本の現状を常に思いつつ、真剣にこの事を考えなければならぬのです。私たちはもっと、この日本にも救われる人が起こされて欲しいと願いますし、より深く強く神の御業が成されて欲しいとも願うものです。そのためには、私たちは祈り続け、より真剣に福音を受けとめ、信仰に信仰を重ねる中で、福音の真理、

信仰の証しを伝えていく必要があります。たとえそこに激しい戦いがあっても、主に祈りながら信仰生活なる信仰体験を伝え続けていく時、聖書で証言されているように、悪の業が減らされていくのです。私たちが信じて祈って信仰的な前進を志してゆく時に、神の御業はこの地を御支配し、そこに救いの御業が進められていくことを思います。そうならば、これより後も、一人ひとりが宣教の推進に携わる中であって、もっと神の栄光を見るものとして、歩み続けたいとも思うのです。

20節を見ますと、「しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではない。むしろあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」とあります。現実的な人間の喜びを主は真っ向から否定し、身を制します。そして「あなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」と言います。つまりは、「命の書にあなたの名が書き記されている事を喜びなさい」と言うのです。もし祈ってその場で奇蹟が起きたなら、誰しもが驚きと共に喜ぶものです。しかしその喜びは一時的なもので、いずれ消えて去っていきます。忘れられてもおかしくはありません。主は所狭しとそのことに囚われずに、「本当の祝福、喜びを求めなさい」と言い続けておられます。私たちが永遠の命の書に名前が書き記されている価値は、地上でのどんな奇蹟や素晴らしい業より、比較できない価値のある事です。この世の多くの出来事、生活の良し悪しの方向性は、目に見える奇蹟や地上での成功、出世と共に大きな喜びが湧き上がるものです。しかし、天の御国に名前が記されている事をそれ以上に喜び、その価値の深さを受け止めるものと教えられます。使徒パウロが書簡で記した有名な言葉にこうあります。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」(1テサ5:16-18)と。しかしそうは言われても、と言いますと語弊がありますが、実際この世にある限りは、喜びも悲しみもあります。正直いつも喜んでばかりはいられないのも現実でしょう。しかし聖書の御言葉を心から受け留めるとき、あなたの名前が天に記されており、あなたの御国はそこにあると宣言されるならば、この世の何ものにも勝る喜びが浮かぶものです。私たちの小さな、狭い人間の思いでは、はかり得ない祝福がそこにあると伝える聖書からのメッセージです。私たちはもっと真剣にこの事実を受け止めていかねばならないことに気づかされます。

次の21節を見ますと、「そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。『天地の主である父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ。これは御心に適うことでした。』」と。この時、主は本当に喜びました。ここで言う「幼子」は小さな子供を言うのではなく、『賢い者』に対する言葉としての「幼子」です。心底、真実から“へりくだる者”という意味です。神の恵みはそういう人に現された。この事をまず第一に主は褒め称えているのです。預言者イザヤの言葉を思い起こします。「いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方が、こう仰せられる。わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、ひりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである(57:15)。」とあります。神は知恵ある者や権威ある者と共にはなく、自らの罪に心砕かれへりくだった人、ここで言う「幼子」と共に住むと言われます。私たちが神の恵みに与るために必要な事は、私たちが神との和解を必要とする罪を自覚し、へりくだる者、砕かれた者になっていく。神はへりくだる事がどんなに大切であるかをここに示されます。22節にあるのもそ

のままです。「すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかは、子が
どういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示
そうと思う者のほかには、だれもいません。」と。地上に現われた神の御子イエス
は、お世辞にも決して見栄えのする者ではありませんでした。むしろ社会
から追いやられる姿をまとしてこの世に来られ、またこの世での生活、営
みをされておりました。ですから、むしろ一般的な姿においては日常的に
まぎれるような日々であったがゆえに、主イエスがどのような方であるか
の真実を知る者はなく、この世に現れたまことの意味を知っていたのは、
父なる神だけでした。また更には、父なる神についても、どんな方である
か分かる様にされたのは、御子なるイエスが父なる神を知らせようと決め
た者たち、すなわち、まことの信仰者にしか教えられなかったということ
です。私たちはイエス・キリストによって、へりくだり、自らの愚かさを
認める故に、神の知識を得る事が出来る様に、神に捉えられ、教会に招か
れました。これは大きな祝福であり、何ものにも比べられないものです。

私たちがここから教えられることは、福音宣教が、実に悪しき者を打ち
砕く力を持つものであり、神の国の戦いに参与する事が出来る働きである
ということ。それ故もっと、真剣に福音を伝えていく必要があるというこ
とを心すものでしょう。使徒パウロが励ましたように、「**時がよくても、悪く
ても福音を宣べ伝えなさい(Ⅱテモ4:2)**」。イエス・キリストの名によって悪魔の
業に打ち勝っていくとの言葉に後押しされるものです。ヨハネの書簡には
こうもあります。「**神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。世に打ち勝つ勝利、
それは私たちの信仰です。だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者では
ありませんか。**」(Ⅰヨハ5:4-5) イエス・キリストを神の子と信じる者に、主にある
勝利の力が与えられています。主を信じる一人ひとりが自分本位からで
はなく、「**主の御心がなされますように**」と本気で祈り、主に心から仕える人
としてあるとき、悪の業は打ち破られていくのです。そしてついには、神の
御業が豊かに現されるに至る神の祝福を妨げている悪しきものを縛りあげ、
主の勝利を見たいと思わないではいられません。あのクリスマスの夜に、
羊飼いたちが口をそろえて言った言葉が浮かびます。「**さあ、ベツレヘムへ行
こう。主が知らせてくださった出来事を見ようではないか(ルカ2:15)**」と。また異邦人の
国から博士たちが一つの星を頼りに幼子の所に辿り着き、「**わたしたちは東方
でその方の星を見たので、拝みに来たのです(マタ2:2)**」と、自分たちの生活必需品
を捧げたあの出来事を、この時にも思い出します。御子イエスの御降誕を
予期せぬ時に与えられた、あの時、あの寒い夜に、一つの救いの光が与え
られたことを思い起こします。そして今の私たちにも、主の憐みにより主
に捉えられて、主を信ずる信仰が与えられているものですから、それぞれ
に主が伴われて、主の御力に満たされて、福音を宣べ伝えていくものにな
らせて頂きたいと願うものでしょう。

受難節(レント)の時にあつて、なお心強く主の再び来たり給うを待ち望
みつつ、悪の力に潰されることなく信仰生活を全うしてゆきたいと願うも
のです。

祈りを献げましょう。

弱きを助け、救いの道を開き給う御子イエス・キリストの父なる御神さ
ま、聖名を崇め褒め称えます。受難節に入り、ここに新たな時を生涯に増
し加えてくださり重ねて感謝致します。あなたの大きい恵みの内に覚え
られておりますことも感謝致します。私たちは弱く小さな者ですけど、あ
なたから与えられた使命をもって為すべき務めに勤しむことができますよ

うに、あなたからの力を増し加えてください。きれいごとでは済まない現
実の只中にあつても、真理と真とをもって主の証しを、為していく者と為
さしめてください。主なる神に身も心も献げつつも、ここに集うべくして
集えない方々にも、上よりの力と慰めをもって支え、養い、最善の道へと
向かわしめてくださいますように。

諸教会の働きを整え用いてください。主の御心を希う信仰の友の祈りに
合わせ、尊き主の聖名によって御前に御献げ致します。アーメン。

讃美歌 405 「すべての人に」

献金・感謝・主の祈り(勝倉初稿)

主イエス・キリストの父なる神さま、一人ひとりと呼ばれてくださり、
教会で、オン・ライン配信で、兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦され
ましたことを感謝致します。

回復された鮎川先生のお説教を通して豊かに御言葉を与えてくださり感
謝致します。私たちがこの一週間をそれぞれの旅路の中で、私たちの名が
天に書き記されている真の信仰者であるように、御言葉を糧として歩むこ
とができますようにお導き下さい。

私たちは必要な物を与えられ、主の僕として生きることが赦されている
ことを感謝致します。今、夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴を
御前に献げます。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。

主が教えてくださった主の祈りを共に祈り、新しい一週間を迎えさせて
ください。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌：89 「共にいてください」

派遣：主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わ
されていくあなた方一同とともに、今後も永遠にあるように。アーメン。

報告：週報通り特記事項無し

後奏：「イエス十字架にかりたまひし時」(J.S.バッハ)